いちばん最後の蝶が来るまで

twnovel おりほん
1
～滅亡編～

灰となった街に手回しオルガンが落ちている。最後の生き残りの男がそれを担ぎ上げ、ハンドルを回す。音楽が響く。音楽とともに、崩壊した建物や死んだ人々がよみがえってゆく。男は音楽を奏でながら街を歩く。泣きながら。音楽を止めたら街はまた灰に戻るのだと、彼は知っている。

海の見えるバス停で、私はバスを待っている。いつまでたってもバスは来ない。人も車も通らない。夕暮れに遠くで鳥が鳴き、ああそうだ、人は滅びてしまったのだ、と私は思い出す。翌朝。海の見えるバス停で、私はバスを待っている。いつまでたってもバスは来ない。夕暮れに遠くで鳥が

みんな泣き喚いてる。あした彗星が衝突して、地球が滅びるんだって。びっくり。日本時間で朝の５時過ぎだって。ねぇねぇ、あたし新聞で調べたの、あしたの日の出時間は５時ちょっと前なんだよ。だからもう一回、太陽が昇るとこ見れるよ。ね、一緒に見よ？　あたし早起きするから。

井戸の底には「何もない」がありました。人々は井戸を訪れては少しずつ「何もない」を汲んで持ち帰ります。どんなに汲みあげても「何もない」は尽きることがありません。「何もない」は地上にあふれてゆき、そのうち全てが「何もない」になりました。最後に井戸だけが残りました。

町で一人生き残った老女は今日も編み物をする。赤ん坊の産着をたくさん編む。TV は映らないし電話も繋がらない。車の運転ができないから壊滅したこの町を出られない。ラジオのノイズに時々人の声が混じるから、たぶん人類は滅びてはいない。この産着もいつか必要な所に届くだろう。

人はみな死にました。突然のことでした。システムだけがまだかろうじて生きています。交差点で信号が赤になり青になり黄色になります。あちこちに死体が転がっています。少しずつ腐っていきます。信号がまた青になります。黄色になります。赤になります。死体は腐っていきます。

太陽が巨大化して海は干上がってしまった。乾いた大地を旅する途中、僕は僅かに残った（塩辛い）水たまりに人魚がいるのを見つけた。「お水を分けて下さる？」「一曲頂けたら」僕は水筒の中身を全て水たまりに注ぐ。どうせもう時間の問題なのだ。人魚の唄は本当に素晴らしかった。

「貴方の星にも魔法使いがいたわ」「まさか」「少女でした。星が爆発する寸前、こちらの星まで魔法で異次元回廊を繋いだ」扉が開く。広場を埋め尽くして咲く花。「回廊は小さくて、渡れたのは花の種だけ。でも貴方の同郷の生物よ」地球最後の生き残りの男は、突っ伏して泣きだした。

突然ですがお知らせです。明日、世界すべてのお祭りを同時開催することになりました。関係者の方々には、急な取り決めで準備期間もないことを深くお詫び申し上げます。明日一日、主催者様参加者様とも、どなた様も心残しのないようお過ごし下さい。明後日、世界はもうありません。

オンボロ車は荒野を走る。10 年前の巨大隕石が人の文明を壊滅させた。細々と暮らす僅かな生き残り達の集落を、男は幾つも尋ねゆく。後部座席にはチェロ。世界中を駆け巡り、仲間を、楽器奏者を探すのだ。そしてオーケストラを結成する。人も愛も音楽も、決して滅びることはない。

蝶が来るまでパフェを食べる。宇宙から赤道付近に舞い降りた蝶の群は、あらゆる動植物を喰いつつ移動している。蝶は寒さが苦手らしく、皆、北極や南極へ逃げた。僕はひとり毎日パフェを作る。病院の予備電源のおかげでアイスは山盛りである。病院の屋上で、僕は毎日パフェを食べる。

森の中には一本の獣道があった。神獣の通る道が。人が現れ木々を焼き、森を畑にしても、獣道の跡には作物は何一つ実らなかった。人が町を作っても、獣道の跡には何も建てられなかった。戦争が始まり全てが焦土と化し、人が滅びた荒野に、一本の獣道がある。美しい神獣が通ってゆく。

この星でいちばん最後の花が咲く
いちばん最後の蝶が来るまで

この内容は、suwazo が 2010 年 2 月～ 2013 年 3 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちの滅亡系 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2013 年 3 月